
銀河英雄伝説―涼宮遙（はるか）さんの転生物語―

更科マイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説―涼宮遙^{はるか}さんの転生物語―

【Nコード】

N3699X

【作者名】

更科マイナ

【あらすじ】

この物語は滅ぶべき宿命を背負った世界で死亡し、銀河英雄伝説の世界に転生をしてしまったある少女の物語です。

前世では元軍人で修羅場を経験し、指揮者としてのスキルを元から有している、ちょっとだけチートな遙^{はるか}さんです。

アッテンボロー家の養子で一つ上の兄がダスティさんですが、序盤がエル・ファシルからなので、ヤンやフレデリカと関わるようになります。

エル・ファシル編が終わったら幼少編を間に入れようかなと思っています。

ます。

なおストーリーは途中まで原作準拠で進行します。

(＊ この小説はらいとすたっふルール2004に則って掲載されています)

はじめに（読むことを推奨します）

主人公は『君が望む永遠』 『マブラヴオルタネイティヴ』 に登場の
すずみやはるか
涼宮遙です。

ちなみにオルタで死亡した遙さんです。

『君が望む永遠』 『マブラヴオルタネイティヴ』 の原作キャラや BETA は一切登場しません（注）。

背景・ストーリー・キャラクターは銀英伝準拠となります。

なお作者は銀英伝ネタで書くのは初めてです。

遙好き以外は誰得小説となっています。

この書き物はぶつちやけ、下書き以下のメモ帳のような扱いで作品
とは言えないよ！

書きながら止めて、また追加投下とかは日常茶飯事です。

記事の編成は多分やりたい放題やるので、区切りがつくか、完結ま
で読まない方が時間の節約になります。

【0】エル・ファシルに降り立ちて―前編―（前書き）

■登場人物

涼宮遙Ⅱ ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（18才/少尉）
リーゼロッテ・エンデ（18才/伍長）

*オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【0】エル・ファシルに降り立ちて―前編―

【I】

宇宙暦七八八年 帝国歴四七九年 四月

輸送船フローラの船内で、ハルカ・シャーロット・アッテンボロの顔が青白い光を放つモニターによって映しだされていた。

その目は遙か先の宇宙の果てに瞬く無数の星々の姿を映し出していて、その星々は肉眼で確認することはできない。

しかしそれも望遠モニターで調整して観ることができた。

しばらくして観るのに飽いたのか、モニターから目を離すと、ハルカは無重力の中、ふわりと体を浮かして寝台の上に手をかけて寝転がっていた。

ベレー帽から豊かな薄いマゼンタの髪が溢れ落ち、ハルカは癖のない髪を無造作に手早くまとめる。

同盟軍の軍服の襟元を緩めると、ベレー帽を顔に当てて目を瞑ってしまう。

洒落っ気の少ないその軍服は機能性を重視した制服だった。

低重力の宇宙で活動することが多いことからスカートは存在しない。

胸元の階級章は少尉のものだった。

本来なら重力制御が効いているはずだが、この老朽化した輸送船は動力部のエンジンが不調で電圧が不安定だった。

そのせいか真っ先に切られるのが重力制御装置だった。

ハルカは枯花のフローラとポートで誰かが言っていたのを思い出していた。

可愛い名前がなぜ枯れ花なのかの理由を知ったのはつい二日程前

のことだった。

幸いなことに空調を切るようなことにはなっていないから寝れないこともなかった。

タンクベッドなどというものがこの老朽化した輸送艦にあるわけもなく、こうして硬いベッドに寝転がって、ようやく寝るのがここ数日のハルカに課せられた日課のようになっていた。

胸元からロケットが浮いて、薄目を開けたハルカの目に留まる。

暗い部屋に青白いモニターの光だけが存在していた。

そのロケットをハルカは開く。

中には小さな写真、一組の夫婦の姿が写っていた。

妻が抱くのは幼子、幼い日のハルカだった。

「父さん……母さん……」

その名を呼んで、ロケットの中の父と母の写真を指でなぞっていた。

不思議な話をしようと思う。

もし今の自分という存在が培ってきた時間と記憶以外にもう一つの人生と記憶が存在するとしたら？

そのもう一つの人生で私は死んでしまったのだと自覚している夢のような記憶。

世界に生まれ落ちた時の不思議な感覚を私は覚えていた。
気がついた時、私は見知らぬ世界、見知らぬ時代にいた。

そこは宇宙を二つに分ける勢力である銀河帝国と自由惑星同盟との長きに渡る戦乱の世界だった。

知識にある時代から千年以上未来の時代。

いや、ここはまったく異なる世界だった。

かつての私の名前は涼宮遙^{すずみやはるか}といった。

前世の記憶にある、私が生まれた地球はBETAという地球外生物と存亡をかけた争いを繰り返していた。

その世界で、私は……おそらく死んだのだろう。

新しく生を受けたこの世界にはBETAは存在しなかった。

地球は宇宙の片隅の存在となり、今では置き忘れられた存在となっていた。

時代も場所も過ぎ去りこの世界に生まれ落ちた。

なぜ前世の記憶を持ったままなのかはわからない。

転生、という言葉がなぜか記憶に残っている。

なぜなのかはわからないけれど、私はこの世界に転生したということだろう。

そしてここでも多くの命を散らす戦争が行われていた。

銀河帝国と自由惑星同盟。

いつ終わるとも知れない戦いの歴史。

繰り返してはいけないと思った。

大切な人を失う、そんな思いをもうしたくない。

私は私の守りたいもののために軍人の道を選んだ。

ハルカ・シャーロット・フェアフィールド。

それが今の私の、もう名乗ることができない、もう一つの本当の名前。

そしてこのロケットだけが、失われたものとの唯一の絆を示すものだった。

寒い。

いつの間にか艦内の重力が元に戻っていた。

私は毛布をかき抱いて胎児のように身を丸めていた。
握りしめたロケットを離さないまま。

【II】

新任伍長のリーゼロッテ・エンデは、食堂に現れた同年代の少女に気がついて、半ば立ち上がりかけた。

彼女はリーゼロッテに気がつくと、片手を上げて合図を送る。
簡易食事のビスケットをトレイに受け取ると、こちらに向かって歩いてくる。

居ずまいを正し、リーゼロッテは少し緊張していた。

「ここ、いい？」

「はい、どうぞ。空いています。アッテンボロー少尉」

思わず敬礼しかけた手を下ろしてリーゼロッテはそう答えていた。
目の前の人物はそういう形式張ったことがあまり好きではないと思いだしたからだ。

「うん、ありがとう」

たおやかに笑った彼女はリーゼロッテの正面に腰掛けた。
流れるような薄いマゼンタ色のストレートの髪は三つ編みにされていた。

その姿にリーゼロッテは惚れ惚れとした視線を向けていた。

「少尉、今日はゼリーカット入りですよ」
「うん」

そう答えて彼女は一枚のビスケットを口元に運んでいた。

そんな些細な仕草さえも絵になるのだ。

それに比してリーゼロッテ・エンデという少女はあまりにも地味な存在であった。

「私はエル・ファシルで普通の食事がしたいです。簡易食事はどうも味気がなくて……」

「うん…… 毎日は確かに飽きるかもしれないわね」

「少尉、よろしければ向こうで機会があれば、一緒に晩御飯をどうでしょうか。もちろん、私が料理します。帝国風ですが……」

先程から考えていた誘いの言葉をようやく口にして、リーゼロッテは気恥ずかしげにトレイの最後のビスケットを口に運ぶ。

その手を彼女が追うように見ていて、うん、と小さく返事を返した後に頷いてみせた。

「リーゼさんの手作り。ぜひお願いします」

そして軽く頭を下げる。

「はい、その、ありがとうございます」

「ありがとって言うのは私の方なんです……」

「あ、いえ……」

小首を傾げた彼女の前で、リーゼロッテは赤面する自分の顔を引っ叩きたくなった。

「それより……」

「はい？」

「同い年なんだから、二人でいる時はハルカって呼んでくれると嬉しいんだけど」

「いや……そういうわけには」
「駄目？」

リーゼロッテは覗き込むような彼女の視線に抗しきれなくなつて、嫌ではありませんと答えていた。

「うん。プライベートでは私も伍長じゃなくてリーゼって呼ぶから」
「はい、ハルカさん」
「さん、はいらないよ？」
「うーん……ハルカ」

そして二人とも目を合わせて笑った。

周囲に無骨な軍人が多い中で、まだ少女とも言つてよい二人は同じ一八才であつた。

かましいという程でもなく、談笑する二人の会話が漏れ聞こえてくる。

その二人に視線を投げかける者もあつたが、一人は若いとはいえ少尉である。

無遠慮な非礼の視線はすぐにそらされることになった。

「ハルカさ……ハルカはすごいね。私と同年で少尉さんだもの」

少女特有の柔軟性から、すでに口調は上官へのものではなく、同年の少女に向けられる気易い口調に変わっていた。

同盟軍士官学校に早期入学を果たし、さらに卒業を一年繰り上げた英才のことは、なりたて伍長のリーゼロッテでさえ知っていた。憧れの存在といつてもよいこの同年代の少女は、さらに美貌まで兼ね備えているのだ。

控えめといつてもいい態度と、そのたおやかな姿は、リーゼロッテに羨望の念を抱かせるには十分だった。

誰に対してもその態度は一貫して優しげであったから、艦内で彼女と出会った人間は少なからず何らかの好意を抱いていたのだ。

リーゼロッテとて小柄ではあるが、赤みがかった金髪はそれなりに自慢してもよいものであったが、いかんせん比べる相手が悪かった。

そして無遠慮な男どもの視線を遮るようにリーゼロッテは席を移動していた。

「運がよかったのよ」

そう言うハルカの口調は遠慮がちだったが、リーゼロッテはそう思わない。

運がよいだけで一八で士官学校を卒業して少尉にはなれない。

彼女には凡人に測れない何かがあるのだと直感していた。

それが何であるのか、目の前の落ち着いた雰囲気少女から読み取るうとしていた。

「ダステイ兄さんだって、本当は私なんかより優秀なもの」

「お兄さんですか？」

「うん、一個上だけど、早期入学で同級生だった時もあるから。それにもっとすごい先輩もいるのに、私が飛び級したのは凄く驚いたわよ」

「主席から四位でしたね」

リーゼロッテの言葉にハルカは肩をすくめてみせる。

まったく本意ではないというふうに。

その謙虚な態度は時に度が入り過ぎなのではないかとも思うのだが、ハルカ・シャーロット・アッテンボローという少女の人格を知るにつけ、それがこの人物の素の姿であると自覚するようになっていた。

【？】

銀河連邦の成立から始まった、銀河史における宇宙暦の歴史は、その転換点を銀河帝国と自由惑星同盟の成立に求めることができる。宇宙に広がりを見せた、巨大な花の如き文化、文明の拡散と、惑星への移植によって人類は広大な宇宙を支配するに至ったが、社会秩序は停滞と倦怠、疲労と苦しみが満ち始めていた。

銀河帝国大帝、ルドルフ・フォン・ゴールデンバウム。

銀河帝国の礎を銀河連邦という巨体を打ち倒すことで打ちたて、ゴールデンバウム王朝を開いた男は無類なき独裁者であった。

鋼鉄の巨人と呼ばれたルドルフは政策、体制において旧世界の一つの秩序を復活させた。

貴族、王族という特権階級の復活である。

帝室を創り上げ、自ら選んだ優秀な人材に特権階級を与え、銀河帝国の番犬としたのである。

ありとあらゆる、有害とされた自由と娯楽は奪われ、彼に逆らうものは容赦のない弾圧と粛清の中に消えていった。

中でも悪名高いのが、劣悪遺伝子排除法である。

当時の帝国人口は三〇〇億を数えたが、警察や社会秩序維持局によって捕まり、処刑された民衆は四〇億を数えた。

おびただしい犠牲、それは全体の一・三パーセントにあたったが、それらはごく一部の抵抗者として扱われ、抹消されていったのである。

盤石となったゴールデンバウム王朝、その水面下で自由や共和主義を掲げる人々は長い冬の時代を迎えていた。

帝国暦一六四年、アルタイル星系で一握りの共和主義者達が声無

き叛乱、即ち奴隷階級に落とされた共和主義者達が氷の宇宙戦を建造してアルタイル星系を脱出した。

それを実行したのは若きアーレ・ハイネセンと付き従った四〇万人の男女だった。

帝国軍に追われ、航海を繰り返しながら、彼らは無名の惑星に身を隠し、恒星間宇宙船を建造してまだ見ぬ未開の宇宙星域に向けて飛び立ったのである。

新天地の開闢！

一万光年の旅路の果てに指導者アーレ・ハイネセンは旅の半ばの事故で没したが、その意思は受け継がれ、人々は帝国の手が及ばない新天地に降り立った。

長征一万光年と呼ばれる長い旅は、半世紀以上に渡る長い旅だった。

帝国暦二一八年、共和主義を掲げる人々は新たな年表を定めた。

銀河連邦の正当なる後継者であることを示す自由惑星同盟発足の年でもあった。

ときに宇宙暦五二七年のことだった。

バーラート星域第四惑星にその根拠地は置かれ、初代指導者アーレ・ハイネセンの名からハイネセンと呼ばれるようになった。

初期の人口はわずか一六万ほどであったという。

自由惑星同盟が成立する一方、銀河帝国と自由惑星同盟が初めて接触するまで百年以上の歳月を待たねばならなかった。

それまでに着実に人口を増やし続け、自由惑星同盟は国家としての礎を着実に築いていた。

初めての接触があつたのは宇宙暦六四〇年のことであつた。

戦艦同士であつたが接触に戸惑った帝国側の戦艦は砲火を浴びて

撃沈され、初の遭遇戦は同盟側の圧倒的な勝利に終わった。

そして銀河帝国は逃げ出した共和主義者達が生き延びていたことを知るのである。

巨大な銀河帝国に対し、自由惑星同盟は矮小な存在に過ぎなかったが、一万光年という距離が両者の戦いを積極的なものに成し得なかったのが事実だった。

それは後に距離による戦いと呼ばれるようになる。

現在のように航路の確保やワープ技術が追いついていなかったこともあり、自由惑星同盟側はただ待てばよかった。

何より同盟には名将が存在していた。

同年のダゴン星域の会戦において、自由惑星同盟は銀河帝国を一方的に打ち破り、史上屈指の殲滅戦を展開し勝利した。

自由惑星同盟の存在を銀河帝国側に鮮明に焼き付けることに成功したのである。

これにより銀河帝国の不当な支配を退けるに足る勢力の存在を知った、帝国の共和主義者達や不穏分子達が故国を脱出し、自由惑星同盟に走ったのである。

自由惑星同盟は膨れ上がり、最盛期を迎え、一地方の反乱勢力から銀河帝国に比肩する巨大国家としての立場を磐石なものとしたのだった。

しかしそれは巨悪の実をも内包することになったのだが、それから数百年、未だ両者は戦い続けていた。

お互いの尾を喰らいあう双蛇のように……。

そして現在、惑星エル・ファシルにおいて一つの戦いが始まるようとしていた。

それは銀河史においては小さな事件、小さな戦いにすぎない。

ときに宇宙暦七八八年、帝国歴四七九年、四月末。

一人の少女がその運命の地に降り立とうとしていた。

【1】エル・ファシルに降り立ちて―後編―（前書き）

■登場人物

アーサー・リンチ（少将／エル・ファシル警備艦隊司令）

ヤン・ウェンリー（中尉／21才）

リーゼロッテ・エンデ（伍長／18才）

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（少尉／18才）

ジヨニー・キャボット（准尉）

*オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【1】エル・ファシルに降り立ちて――後編――

【？】

――エル・ファシル警備艦隊――

エル・ファシル警備艦隊司令、アーサー・リンチ少将は苛立ちを隠せずに手元の資料を目の前に放り出した。

今読もうとしていた書類の内容を忘れ、リンチ少将は苛立ちを表すように指先をテーブルに何度も叩きつけた。

目の前で副官が恐縮そうに立ち尽くしている。

「その話は事実かね？」

「確証はしかねますが、帝国軍がエル・ファシル宙域に侵入する可能性があります」

「馬鹿なことを、帝国軍がこのエル・ファシルに来るといえるのかね？」

リンチ少将の厳しい視線を受けて副官は俯いた。

「帝国軍がエル・ファシルに現れるなどありえん。この時期に現れるのはせいぜい海賊程度だ」

「しかし帝国軍の哨戒艇と思わしき艦艇が目撃されています」

「思わしき？」

「は……」

「その程度の情報で、君は帝国軍がエル・ファシルに侵攻してくると主張するのかね？」

「それは……」

「ただの哨戒艇、もしくは海賊連中の艦艇ではないのかね？」

「その可能性は否定できませんが……」

「放っておけ」

「は？」

考え込んだような素振りの後にリンチ少将がそう告げて、副官は戸惑いの目を向ける。

それを邪険に払うように手を振った上官に敬礼して、副官はその場を立ち去った。

入れ替わるように冴えない風貌の若い中尉がリンチ少将の前に立った。

黒い髪に黒い瞳の青年はベレー帽に手をかざして敬礼する。

「ん、何かね君は？」

訝しむように見上げたリンチ少将が、そのうだつの上がない青年を睨みつける。

青年の上官に敬礼する姿はまったく締まりがなかった。

「ヤン・ウェンリーです、閣下。御用があると伺って参りましたが」
「ああ……」

そう言われて思い出したのか、リンチ少将はろくに読んでもいない放り出した書類を指さした。

「ヤン中尉、君に任務を与える。士官学校出のひよこが来るから君が面倒をみたまえ」

「は、はあ……それが任務でしょうか？」

「そうだ。優秀らしいぞ。卒業成績は上位四位だったらしいがひよっこだ」

そう吐き捨てた上官の様子にヤンはやれやれと内心溜息を付いた。この上官殿のエリート嫌い、いや優秀嫌いは筋金入りらしい。

特に優秀な部下に対して、リンチ少将の何とも言えないいびりがあつたりするのだが、ヤン自身は士官学校での成績は不可もなくといったところだった。

いやむしろ落第寸前だったのだが、ヤンもこの上官に嫌われている節があつた。

あまり関わってたくないのでヤンは資料を受け取って脇に挟んだ。

「任務受領しました。新人教育ですか？」

「馬鹿をしないよう君が見ている。どうせ君もやることなどないだろう？」

「はあ……」

「行きたまえ。私は忙しいのだ」

「失礼致します」

ヤンはおざなりな敬礼をして背を向ける。

新人教育ねえ……と、部屋を退いた後、ヤンは思い切り溜息を付くと肩を落として歩き出した。

【？】

「では少尉、私はこれで」

輸送船のタラップで、リーゼロッテ・エンデ伍長の敬礼を受けてハルカも答礼を返す。

二人が降り立った軍港の周囲は騒がしく、ひっきりなしに輸送力
ートが輸送物資を港の倉庫へと運んでいく。

「駐留艦隊の本部センターまではお迎えが来てると思いますから」

「リーゼは一緒に来ないの？」

「はい、私は直接勤務地に向かいます。とはいっても場所はここな
んですが」

「そうなの？」

「はい。あ、元帝国人で編成された部隊があつて、第三七戦隊つて
言うんですけど、そこに所属になります。部隊が地上勤務になつて
まして」

「第三七戦隊ね」

「落ち着いたらメールを送るんで」

「うん、美味しい晩御飯楽しみにしてる」

「あは」

はにかんで笑うと、リーゼロットはそれではと告げて去る。

リーゼロットの後姿を見送って、ハルカはエル・ファシルの青い
空を見上げた。

宇宙暦七八八年、帝国暦四七九年、四月二八日、ハルカ・シャー
ロット・アッテンボロー少尉はエル・ファシルの地を踏んだ。

やがて訪れる騒乱と戦いが己の運命を大きく変えることを知らず
に。

本部センターに確認の電話を入れるとすでに迎えに出ているとい

う。

たかが少尉に過分な出迎えといってもよかった。

「実際、それほど距離が離れているわけでもないのだが、何か理由があるのかと勘ぐってしまう。」

「迎えってあれかな？」

ハルカがそれらしい車に乗った軍服姿の青年を見つけると、向こうもハルカに気が付いたようだった。

そのままこちらに向かってくるのが見えて、目の前に来るタイミングに合わせてハルカが敬礼すると相手も答礼を返した。

「アッテンボロー少尉ですね？ 本部のジョニー・キャボット准尉です。お迎えにあがりました。」

「わざわざありがとうございます。あの、一少尉に少し大げさな気もするのですが……」

控えめにハルカが切り出すとキャボット准尉は苦笑いをする。

「いくつか理由があるんですよ。市内を軍服着て歩くのはここでは少し勇気が要ります。」

その言葉から、エル・ファシル市民と軍人との間に何らかの軋轢があることを汲み取れたが、ハルカは促されるまま車に乗り込んでいた。

車が走り出し、窓から見える風景はごく普通の都会といってもよい。

ハイネセンポリスと比べれば辺境惑星の田舎都市なのだが、垣間見える市民の生活の姿はそれほど変わるものでもなかった。

走り出してから十分あまりで車は本部センターに到着していた。

【？】

「先輩、起きてください。先輩」

まどろみの瞬間を邪魔されて、ヤン・ウェンリーは不機嫌に目を覚ます。

睡眠を邪魔される不快感というものは何時になってもなれるものではない。

しかしどこか懐かしい声と香りに肩を揺り動かされて、ヤンは寝ぼけて答えていた。

「なんだい、アッテンボロー。あと五分寝かせてくれ」

ベレー帽を目深に下ろしてヤンは椅子の上で器用に寝返りを打つ。

「五分もありません。待ったもなしですよお」

あきれたような少女の声が響き、寝ぼけていたヤンの灰色の頭脳もようやく起きだしていた。

「ん？」

現実のその声に目を覚ますと資料室の天井が見えた。

すぐ傍に立つ気配にヤンは顔を上げる。

まだ焦点の定まらない目で、目の前に立つ新任少尉をヤンは呆けた顔で眺めていた。

「君か……」

ハルカ・シャーロット・アッテンボローは微笑んで目覚めたヤンを出迎える。

「おはようございます先輩、こんなところで寝てると風邪を引きますよ?」

「生憎と昔からコンソールとの相性は抜群だね。風邪を引いたことはないよ」

「はあ……ヤン先輩は酷いと思います。はるばるハイネセンから後輩がやってきたのにのんびりお昼寝してるんですから」

「まあね、どうせ放っておいてもここに来るだろう? 私は新人教育のために英気を養わなくちゃいけないんだ」

ヤンは起き上がると目の前に立つハルカは道を空ける。

資料室はかなり狭いのだ。

うん、と軽く背伸びをすると、ハルカの目の前だということもはばからないで大きなあくびをして見せた。

「ダステイは元気かい。ところで、君が卒業するの来年じゃなかったっけ?」

「兄さんは元気ですよ。それと私は今年卒業しました。飛び級したってメールでお知らせしたじゃないですかあ。ごたごたしてたのは知ってますけど、ちよつと酷いです……」

「あー……そうだったね、すっかり忘れていたよ」

抗議するようなハルカの非難を受けると、ヤンは天井を見上げて少しはねた黒髪をかいてみせる。

そして今さらのように手元の資料に目を通す。

「なるほど、優秀だね。エル・ファシルの辺境警備艦隊なんかよりはハイネセン本部が欲しがりそうなもんじゃないか」

「あまりそういう言われ方をされるのは好きじゃありません」

少しすねたような顔でハル力が答える。

「ここのお偉方はね、とんがってたり優秀なのがお嫌いなんだよ。目をつけられなくなかったら適当にやってくれ。まあそれは置いとこう。よく来たねハル力、初めての部下が後輩で助かったよ」

「はい、よろしく願います」

ヤンが差し出した手をハル力が握り返す。

「とにかく、私等のやることは上じゃ、ないと思ってくれている。もっぱら下のこつち関係で動くことになると思う。何せ苦情処理係りなんてやらされててね。実にやりがいのある仕事だよ」

その口調はすでに放り投げたような響きを持っていて、当のヤンは暑苦しいのかベレー帽を顔に扇いで見せた。

「苦情処理ですか？」

「軍とエル・ファシルの市民の間はあまり良くなくてね。素行の悪いのが下に降りてることもあって何かと問題視されてるのさ」

「そんなに問題なのですか？」

「そうだねえ……」

二人一緒に資料室を出て、歩き出したヤンの足の向くままにハル力はついていく。

「うーん、問題にしたがる連中がいるってことがあるねえ」

「はあ……」

「紅茶でいいかい？」

ヤンが販売機を指差す。

ハルカは一瞥するが特に迷わず紅茶と答えていた。

二人に共通するのは紅茶が好きということだ。

もつともこんなところの紅茶では二人とも満足はしなかったが。

ハルカは熱い茶色の液体が入ったカップを受け取る。

ビル二〇階の窓際からエル・ファシルの町並みが一望できた。

「知つてのとおり同盟には帝国からの亡命者も多い。そして彼等も兵役に就くんだが、大概帝国出身者というものは一箇所に集められやすいんだ。エル・ファシルも同様でね。上の警備艦隊と切り離されて地上勤務に就いている」

帝国亡命者の集団で特に有名なのはローゼンリッター薔薇の騎士連隊だ。

だが彼等には不名誉な逸話も伝えられていて、元帝国人に対する同盟側の信頼は決して篤いものではなかった。

つまりはそういった同盟側のひずみのようなものが不協和音を生み出しているのである。

ハルカは先日親しくなった同年代の少女の顔を思い浮かべていた。

「地上部隊というのは？」

すでに予想はついていたものの、ハルカはその問いを口にしていった。

うん、と答えてヤンはカップに残った茶色い液体を飲み干してクシャリと漬した。

「エルファシル警備艦隊、第三七戦隊、駆逐艦タイガーフット。今軍港にいる連中だよ」

【1】エル・ファシルに降り立ちて―後編―（後書き）

続きはまたあとで更新。

この読み物はそうやって書かれるので、なろうの作法は一切無視することになります。

1つだけ言っておく・・・（´・ω・｀）恋愛要素はあってもOK？

【2】嵐のまえぶれ―前編―（前書き）

■登場人物

フランツペーター・ガームリヒ（中尉／24才／駆逐艦、タイガー
フット艦長）

アマーリエ・ドレイヤー（准尉／22才）

ゴットフリード・ドレイヤー（中尉／24才）

ハルカ・シャーロット・アッテンボロー（少尉／18才）

ヤン・ウェンリー（中尉／21才）

ジョニー・キャボット（准尉／21才）

*オリキャラの名前はランダムルーレットで作っています

【2】嵐のまえぶれ―前編―

【？】

自由惑星同盟と銀河帝国の一五〇年に及ぶ長き戦いの歴史の中で、銀河帝国から自由惑星同盟へと亡命する人々の中には、自由主義者や共和主義者といった思想犯以外にも、政治闘争や貴族、皇族同士の権力争いに敗れた帝国の政治家や貴族が数多くいた。

来るものは拒まずの民主政治を掲げる自由惑星同盟はこれらの亡命者を受け入れ、そして組織の中に組み込み内包していったのである。

それは小さな芽に過ぎなかったが、銀河帝国が抱えていた内面的な歪みをも抱えることになったのである。

銀河帝国との戦いが長引くにつれ、建国当初の志は忘れ去られ、帝国との戦いがすべてに置き換わってしまっていた。

思想の違い、国家体制の違い、両者の争いの根本はそこにあつたが、もつともわかりやすく彼等を戦争に駆り立てたものは憎しみであつた。

互いに互いを滅ぼすまで終らない戦いは両社会を変質させたと言つてもいいだろう。

銀河連邦の最盛期、人類の人口は三〇〇〇億を数えたが、現在は四〇〇億を数えるに過ぎなくなっていた。

一度の会戦で、何一〇万か一〇〇万を数える死者を生み出すのだかつての地球の歴史にある戦争とは規模や桁数そのものが段違いに異なつた。

その分、多くの悲しみと苦しみを撒き散らし、人々は憎しみという負の連鎖に捕らわれていったのである。

帝国亡命者は元帝国人ではあるが、正式に自由惑星同盟の市民権を得た人々であり、定められた法律により、いかなる迫害をも享受しない立場を与えられていた。

しかしながら元帝国人であるというただ一点において、彼等の存在そのものに疑念の目を向ける輩も存在したのである。

エル・ファシル警備艦隊、第三七戦隊所属のフランツペーター・ガムリヒ中尉は自棄酒を煽っていた。

バーの中でカウンターに座るのは彼一人、身の丈二メートルはあろうかというその背中は、まるで熊が座っているかのような印象を周囲に与えていた。

彼に近よる者はなく、席に着く客は一樣に彼を避けるようにして遠巻きに見ていた。

「何が自由の国だよ……俺の先祖様はこんなちっぽけな自由のために戦ってきたんじゃないやねえ。何が自由惑星同盟だ、自由万歳だ……くそつたれだ」

すでにろれつの回らなくなった口で呟き、空になったグラスを前に置いた。

「酒」

「もうよした方がいい」

馴染みのバーテンがペーターに声をかけるが、一言、酒と繰り返す男の声に諦めてグラスを手を取った。

カウンターに再度置かれたグラスを手に取りうとしたペーターの横から腕が伸びて、濃縮された濃い色の液体が入ったグラスは奪い取られていた。

「中尉、もういい加減にしてください」

「あ？」

女の声が響き、酒に酔った愚鈍な眼を横に向けると、肩まであるシルバーグレイの整った髪に青い瞳を持つ女がペーターを睨みつけていた。

「ああ、これはこれは、アマーリエ・ドレイヤー准尉じゃないか。お前も飲みに来たのか？」

「違います。連れ戻しに来ました」

「俺は休暇中だよ」

むすつとした顔で酒臭い息を吐いて、ペーターは部下の准尉に向き直った。

「新人の着任式があつたんですけど、メール見てないんですか？」

「ああ……携帯置いてきたからな」

「中尉……もつと責任持つてくださいよ」

「給料分は働いてるさ」

あきれたようなアマーリエの視線にペーターは飄々と答えて見せた。

「酒……」

ペーターの目はグラスの酒に注がれている。

「不良酒なんかこうしてやりますっ」

アマーリエは少し意地悪に笑うと、手の中のグラスの液体を一気に飲み干していた。

焼け付くような咽喉へのアルコールの強い刺激に、一瞬頭がくらくりとするが、口をぬぐってワイルドに笑って見せた。

見事な飲みっぷりと言ってもいいだろう。

「それ、俺の酒だ」

空になったグラスをペーターが名残惜しく見つめた。

「あーあ……」

「艦長なんだから駄目ですっ、もっと示しをつけてください」

アマーリエがペーターの腕を引っ張って立たせようとするが、いかんせん熊のような大男だ。

その体重の半分もない彼女では一寸たりと動かすことはできなかった。

そのときバーの扉が開いて若い客が数人入ってくる。

そして軍服姿でバーに座る軍人を見つけて囁き合った。

アマーリエはその様子に気がついて悪い予感がしていた。

早くここを出なければならぬ。

「ほら、中尉ってば」

「うるせ」

まるで子どものような、とペーターより二才若いアマーリエは内

心ため息をつく。

「おい見ろよ、軍人様がこんな時間に若いねーちゃん連れて午前様かよ」

「いい気なもんだな」

「おい、こいつ、虎のガームリヒじゃねえか？」

その方向にペーターは顔を向けるがすぐにカウンターに視線を戻した。

酒が入っているのか、若者数人はペーターに絡むのを止めようとしない。

「役立たずの酒飲みつてのは本当なんだな？ あんたら軍がいるおかげでこつちに物資が回ってこねえんだ。楽しんで女はべらせて大層なご身分じゃねえか、このバカ虎がよお。でけえ図体しやがって、役立たずのろくでなしじゃねえか」

「大方帝国のあばずれ女が虎とやっちまって生まれたんだらうよ」

下品で安っぽい挑発にアマーリエは眉をしかめる。

普段ならペーターがこの程度の挑発に乗ることはない、だが今は酒が入っている。

「何から生まれたって？」

声質の変化に危険を察知すると、アマーリエは慌ててペーターの軍服の裾を掴むが、その手は振り払われていた。

据わったペーターの眼を見て、彼女は避難するように身を翻すと部屋の隅に逃れた。

こうなっては止める手段が彼女にはない。

携帯を取り出して緊急コールをかけていた。

【？】

「派手に暴れてくれたな」

シルバークレイの髪を撫で付けて、ゴッドフリード・ドレイヤー中尉は部屋の隅で不貞寝するフランツペーター・ガムリヒ中尉に声をかけていた。

ドア越しの覗き窓の向こうは営倉室だった。
暗い室内は狭く、ベッドだけが見える。

「うるさいぞゴッドフリード、頭が痛い」

「飲みすぎだ。罰として中和剤の投与は禁止だと。一般人相手に虎が暴れてるって通報されたいらしいな。警察に射殺されなかっただけありがたいと思えよ」

いかつい眉を歪めて、二日酔いに濁った赤い目をゴッドフリードに向けて、ペーターは唸って見せた。

その様は虎というより熊が唸っているかのようなだったが、そんなどうでもよい感想をゴッドフリードは飲み込んで話を続けた。

「民間人相手の暴行。一週間は出られないと思えよ？」

「はん」

吐き捨てるように応えたペーターは壁の方に顔を向けて横になる。相も変わらず吐き気が胸の内に湧き上がってくるが、すでに吐き出すものは吐き出していたから、口の中に苦くて酸っぱいものがこみ上げたのみだった。

「というところだが、幸いなことに担当官殿が口を利いてくれてね。」

出られるそうさ。あと一日は大人しくしてろ」

「担当官？ 本部のか」

「ああ、苦情処理係の中尉殿だったかな。後で会っだろうから礼は言っておけよ？」

「どうせ嫌味しか言われないさ」

「けじめはつけておけよ？」

「わかってるさ」

ふう、と息をついてゴッドフリードは営倉室から身を引き離す。

困ったもんだ、とベレー帽をかぶりなおす。

妹のアマールリエから緊急連絡を受けたものの、酒場にゴッドフリード達タイガーフットの面々が到着した時は市民ではなく、警官相手に遣り合っていたのだ。

スタンガンでペーターを大人しくさせたものの、説教を食らったのは勿論、店の修理代や謝罪に奔走することになったのだ。

店のバーテンダーからは当分は出入り禁止を言い渡されたのだが、それを伝えるのを忘れていた。

まあいいか、とゴッドフリードは肩をすくめる。

「兄さん、どうだった？」

本部ロビーに出るとアマールリエが立ち上がって出迎えた。

その隣に見かけない女性士官がいたが妹の問いに先に答えていた。

「あれでは話にならん。あと一日、酒が抜けるまでは大人しくしてもらうことになった」

「そう、よかった」

「あまりいいとも言えない状況だな」

ゴッドフリードはすぐ傍にいる女性士官に目を向ける。

穏やかなグリーンアイに薄淡いマゼンタカラーの髪を三つ編みにした、まだ若い娘だった。

おそらく妹のアマリーエより年下だった。

少女と言っても通じるくらいだから、ゴッドフリードは士官学校出の新人であると予測していた。

「こちらはアッテンボロー少尉よ。艦長が出れるよう書類の手続きをしてもらったの」

「ハルカ・シャーロット・アッテンボロー少尉です。この度はご足労様でした」

ゴッドフリードに敬礼する様は慣れていて少し驚いたが、それは顔に出さずに答礼を返す。

「ゴッドフリード・ドレイヤー中尉です。本部の方にご迷惑をかけて申し訳ない。あれも反省しているのでご容赦を」

「あ、はい。大丈夫です。お酒はほどほどにとヤン中尉が仰っていました」

「徹底させます」

ヤン中尉、確かまだ若い青年だったな、とゴッドフリードの脳裏に冴えない男の顔が思い浮かぶ。

「ヤン中尉はどちらに？」

「今は苦情係センターにいますけど」

「そうか、迷惑をかけたので後日お礼に伺うとお伝えください」

「はい、承りました」

彼女の受け答え一つ一つが柔らか味を帯びていて、ゴッドフリーの警戒心は霧散していた。

「では失礼、ドレイヤー准尉、行くぞ」

「はい、では少尉。うちののん兵衛艦長をお願いしますね」

アマーリエの言葉にクスクス笑う素振りを見せて、アッテンボロ少尉は頷いて見せた。

その笑顔が印象的で、ゴッドフリーの胸の内にある種の余韻を残していた。

二人は連れ立って本部センターを出ると、待たせていた車に乗り込んでビルを後にした。

【？】

「だいたい、あらかた終ったようだね」

「お疲れ様ですヤン中尉」

今日一番の特大のため息をついて、ヤンは苦情処理係室のコンソールの前から立ち上がった。

「キャボット准尉に手伝ってもらって助かったよ。兼任なんてするもんじゃないな。給料以上の超過勤務だよ」

「中尉には苦情処理係の仕事の方が合ってるんじゃないですか？」

「そうかな？ 私としては一日、本でも読んでいられる仕事をしたいかなあ」

顎をこするヤンに苦情処理員のキャボット准尉が苦笑を向ける。
本人としては本気で言っているのだが、どうやら冗談と受け取ら

れたようだ。

二人は休憩の一服に待合室に向かう。

「しかしまあ、市民の負担はかなりのものだね。生活レベルで影響を及ぼしている。軍事物資としての徴収が多すぎるんじゃないか？」

「駐留部隊の兵士だけで二〇万人、人口三二〇万程度のエル・ファシルでは正直、口を賄いきれるものではありません。辺境星系の警備艦隊はどこも似たり寄ったりらしいですが、エル・ファシルは帝国に近い分、あまり手薄にできない現状があります。ですからどうしても一〇〇〇の艦艇と兵士二〇万は必要不可欠になります。苦情の多くが軍と市民の間のトラブルなのもそこに原因がありますね」

「そして影で物資の横流しがあるというわけか……中央から離れるほど腐敗は蔓延していく。賄賂に横領、すべて金、金、金か……」

待合室のソファに足を投げ出して、だらしなくヤンが寝転ぶ。

軍の物資が横流しされているという憶測はヤンの妄想ではなかった。

事実、物資の出入記録を見れば不自然な項目は数多くあり、用途不明のコンテナが存在したりと枚挙には暇がない。

しかしそれを調べる権限を持ち得ない上に、それを調べることができる機関も辺境には存在しなかった。

事実、辺境のいくつかは半ば不法の蔓延地帯となっていた。

「いつそ帝国でも攻めてくれば存在意義を盾にできますけど、最近では海賊相手が多いですからね。軍の方でも不満が溜まっています。こちらは中尉の方がご存知だと思いますが」

「第三七戦隊とかね」

今日もその艦長が大暴れしてくれたところだ。

本人は営倉入りとなり、始末書を書かせたが、彼の負担はそこま

で、諸々の弁償やら各所への対応はすべてヤンに回されていた。しかしあまり長く拘禁しておくのも業務上の問題が生じるので、反省文を書かせた上で、ヤンの監視つきを条件に営倉から出る運びになったのだ。

「管理職になんてなるもんじゃないな。特に揉め事が約束された問題児のね」

「ご愁傷様です」

キャボット准尉は十分に同情していたが、それくらいは耐えてもらわねば、私だって胃薬を手放せないんだぞ、とその表情が雄弁に物語っていた。

エル・ファシルに駐留する部隊の中に爪弾きものの戦隊が存在する。

銀河帝国からの亡命者及び、その子孫から編成されるエル・ファシル第三七戦隊である。

帝国人といっても先代がそうであっただけで、今では自由惑星同盟の市民であり、同盟軍内部においては建前上の差別はないことになっているが、帝国出身者の出自を持つ兵士は隔離しておこうという風潮が今なお強く存在していた。

エル・ファシル第三七戦隊は地上警備の名の下に、そのほとんどが地上で勤務を命じられていたが、実質は監視の元に粗探しをされる日々であった。

修理の必要のない戦隊の艦艇、駆逐艦タイガーフットもドックに終日駐留となっている。

このタイガーフットもいわくつきの老船で、元々は帝国軍の艦艇

だったが、二〇年前に銀河帝国から亡命してきた貴族が乗っていたものだった。

その当時の艦名はすでに不明である。

その後改装を重ね、エンジンも取り替えているが、未だに現役の艦艇であった。

今なお廃艦にならずに存在するのは、まともな機能水準を最低限満たしているからであった。

警備艦隊内では老朽艦呼ばわりされ、元帝国人が多いことから軽視されがちなタイガーフットは、いまだ戦場に出たことがなかったのも嘲りを受ける要因ともなっていた。

老朽艦と馬鹿にされることも多く、戦隊員の中では不満の声が上がつていた。

先日起きた酒場の騒ぎも軍と市民の確執が浮き彫りになったものであった。

そのとばっちりを受けるのが地上勤務についている第三七戦隊の面々であることが多く、問題児集団として白眼視されていたのである。

【3】嵐のまえぶれ―後編―

【？】

―五月一日―

エル・ファシル駐留艦隊の本部センタービルの一室で一組の男女が向かい合っていた。

「辞令、ハルカ・シャーロット・アッテンボロー少尉。本日五月一日をもって第三七戦隊の勤務を命じる」

「謹んでお受けいたします」

ヤンが形式的な辞令の訓辞を述べると、真剣な面持ちでハルカがそれを受けて敬礼をすると、ヤンも適当に返してソファに座った。ヤンが座るように促してハルカもソファに腰掛けた。

「部下ができて楽できると思ったらこれだよ」

本気か冗談ともつかない台詞を吐くと、ヤンはベレー帽に指を引っ掛けて廻し始めた。

上司の威厳など微塵にも感じられなかった。

案外本気で言ってるのではないかとハルカは解釈していた。

「本当ならここに着いた日に辞令が下りてるものなんだが、どうにも適当だね。正式にどこに所属させるのか決まっていなかったんだ。どこも通信オペレーターが不足してるんだが、私のどこに来たからには向こうの担当官に無理やり捻じ込んだ。第三七戦隊からも人を回せってせっつかれていたんだ。君なら十分やっていけるはず

さ。何せ情報管制のプロだからね」

「えと……先輩、質問をしてよろしいでしょうか？」

「何でもいいよ」

片手を挙げて問いを發したハルカにヤンが許しを出す。

学生時代、ヤンは控えめに見えるがこの勉強熱心な後輩に何度も質問攻めにされて、その対応のためにマニュアルを作っていたこともあった。

そして大概が一度では終らないことも度々あった。

「ヤン先輩は幕僚士官のはずなのに第三七戦隊の地上担当官なんですよね。何で苦情処理係まで兼任しているんですか」

「単純に言うと押し付けられたのさ。何もしてない暇人だと思われるしね。実際やることなんて宇宙に出てない限りほとんどないし、上は下のことにまったく興味がなくてね。見栄っ張りな司令官殿はご自分の印象ばかり気にしている人なのさ」

「アーサー・リンチ少将でしたね。中央にいた頃はそれなりに優秀な方だと聞いていましたけど」

ヤンの手からベレー帽が外れて宙を飛んだのをハルカが受け止めて、それをヤンに差し出す。

「君ってどこに情報網を持っているんだい？ 確かに優秀だったらしいけどね、エル・ファシルに着任してからの司令官殿は自己保身の塊だね。えーと、これはここだけの話で秘密だぞ」

「はい、勿論です。秘密は厳守いたします」

そう言ってくすりと笑うハルカに、ヤンは真面目腐った顔でシーと口に指を当ててみせた。

「近い内に警備艦隊の軍事演習があるんだが、司令官殿はマスコミと政治家を呼び込んでデモンストレーションをするつもりらしい。テレビ局も一緒にね。政治宣伝に軍と自分の地位を利用するあたり、どうも信用を置いていい人物ではないな。少なくとも私は命を預けたいとは思わない」

あけすけな上司への批判だったが、ヤンの性格を知るハル力はその評価を胸の内にしまい込む。

「はい、他言はしません。でも私が第三七戦隊に配属ということは宇宙に上がることもありますか」

「そうだね、その可能性は高いよ。上も長いこと連中をこっちに置いておくことのデメリットにいまさら気がついたようだね。さっきの辞令も今日発行されたものなんだ。虎を地上に置いておくのは危険だとね。地上に放し飼いにするよりはいいだろう？」

「虎ってガームリヒ中尉ですか？」

「なかなか個性的な男だったろう？」

ヤンがハル力の質問に質問で返した。

「見かけによらず丁寧な人でしたね」

「酒さえ入らなければ、という注釈がつくけどね」

先日、営倉室から出て復任の挨拶をしにきた巨漢の中尉の名をハル力は思い出していた。

柔らかい栗毛にいかつい顔と二メートルの体躯を持つ、まさに熊という一言が似合う青年だった。

見かけによらず、ヤンに丁寧な礼を言う姿に、人は見かけによらないものだという印象をハル力は抱いていた。

「それと私も本日を持って苦情処理係は解任らしい。正直こつちの水も悪くなかったんだけどね」

ベレー帽をかぶりなおしてヤンが立ち上がり、それにならってハルカも立ち上がる。

「キャボット准尉が嘆きますね」

「嘆かせておけばいいさ。あれは人の愚痴を訊くために生まれてきたような男だからね」

二人は顔を見合わせると、共犯者のようにくすりと笑い合った。士官学校時代、アッテンボロー家の兄と妹は、ヤン・ウェンリーとジャン・ロベール・ラップを交えて、同じ席を囲んでは、先輩後輩を越えた付き合いをしていたものだった。

「では一足先に私は宇宙に戻るとするよ。戦隊のドレイヤー中尉は目端の利く男だから頼りにするといい。あっちは女傑が揃っているし、噂と違ってアットホームだからね。君のことだから心配は要らないと思うけど」

「はい、問題ありません。ヤン先輩、ありがとうございました」

「あ、いや……体には気をつけて」

「はい」

丁寧に頭を下げるハルカにヤンはそう告げると、背を向けて立ち去った。

その後をしばらく見送ってから、ハルカは港のある方角を眺めていた。

【3】嵐のまえぶれ―後編―（後書き）

続く（1／3）

嵐のまえぶれのタイトル変えると思います（多分）

私、書くのとりいわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699x/>

銀河英雄伝説—涼宮遙（はるか）さんの転生物語—

2011年10月20日03時03分発行